



第64号  
2026.2

白日会事務所

白日会事務所

〒104-0031 東京都中央区八丁堀四一八-1101

TEL (03) 6280-5218 (FAX 兼)

郵便振込 0019-41398157 白日会

HP: <https://www.shirahikokai.com>

MAIL: [hakujitsu-mail@trad.ocn.ne.jp](mailto:hakujitsu-mail@trad.ocn.ne.jp)

本号をもちまして  
紙面の会報は最後  
となります。

## 白日会新体制となる

白日会の代表就任にあたり

白日会代表 齋藤秀夫

昨年秋の総会で、私が会の代表となり、常任委員の中谷晃さんを代表補佐として、今後の新しい白日会を皆さんと共に一丸となって作っていくという方針に決まりました。

会長職はおかずに、白日会の掲げる「研究団体」の初心に帰り、皆さん会員一人一人が白日会の一員である事をより自覚し、積極的に会の運営に携わって頂きたいと思えます。

中山先生は、白日会を解散寸前の危機から救い現在の隆盛の基礎を築いた伊藤



清永先生の路線を受け継ぎ、若い作家の育成に尽力され、多くの優秀な作家を輩

出しました。又、「見えるものを通して見えないものを描くこと」を理念に掲げ、

「写実の王道」を目指されました。その中山先生が、白日会創立百周年記念展を

盛大な成功に導いた後に急逝されてしまいました。しかし私達はこの方針を継承

し、より一層邁進していきたいと思っております。

第102回展は、白日会が新しい一歩を踏み出す重要な展覧会となります。会

員をはじめ在籍者の皆さんには自分の作品をしっかりと描くだけでなく展覧会を良

くするよう御協力をお願いします。

また、当会が今日ありますのは、これまでの外部の皆様からのご指導、ご鞭撻そ

してあたたかいご助力あつてのことと存じます。この場を借りて深く感謝申し上げ

ます。白日会はさらに深化し発展を続け、芸術の本道を歩んでいく所存ですの

で、今後ともご支援と応援の程、宜しくお願ひ申し上げます。

## 第一〇一回白日会展

令和七年三月二十日(三十一日)

国立新美術館

### 第101回白日会展概要

事務所・常任委員 寺久保文宣

第101回白日会展は、白日会創立百周年記念展の翌年の展覧会として新たなスタートを始める展覧会でありました

が、百回展を首長としてまとめられ、また白日会百年の結晶でもありました中山

忠彦会長が、令和6年9月24日に突然にご逝去されました。齋藤秀夫副会長が会

長代行となつて101回展の指揮をとられ、中山先生の代表的作品と晩年密かに

制作されていた彫刻2点を含んだ特別陳列「追悼—中山忠彦—」として第5室に

陳列しました。中山先生を顕彰し追悼するこの特別陳列は、大いに鑑賞者の注目を浴び、また出品者には先生の画業の偉

大さを痛感することとなりました。

百回展から平常会期の初日となる日を「内覧会」とし、出品者と来賓招待の方



▲ 第5室 特別陳列「追悼—中山忠彦—」の会場風景

のみ入場可能とし、101回展からは「研究団体」として出品者相互や指導者との出品作を前にした研究的対話と交流の場を志向しました。今年中山先生の特別陳列の作品群から無言のご指導を受けることがメインとなりました。なお、内覧会、講堂での授賞式に続きレセプションを開催する予定でしたが、会長の喪に服しレセプションは行いませんでした。また本展では中山忠彦賞が新設されました。



▲「中山忠彦先生を偲ぶ会」 齋藤代表の挨拶（東京會館）

3月26日には東京會館で「中山忠彦先生を偲ぶ会」を開催しました。内外の多くの方々にご参列いただきましたことを感謝申し上げます。また、中山先生の特別陳列、偲ぶ会、追悼文集にご協力いただきました皆様、そして何より中山良江夫人に、この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

通例となりました「毎日がギャラリートーク」も好評で、また恒例となりました「公開クッキー講座」は、百回展より若手作家の実演となりましたが、午前の部は満席に午後の部もほぼ満席の盛況が続いています。



▲公開クッキーの様子

2020年からはほぼ4年間のコロナ禍に見舞われましたが、出品状況はそれほど大きな影響は出ませんでした。また入場者数は回復傾向にあり、これまでの本展入場者の最高数は95回展の2万人弱でありましたが、コロナ禍初年の96回展は一般公開できず、97回展は95回展の半分、98回展から毎年およそ2千人ずつ増加し、99回展では4分の3まで復活、百回展で例年並みに復活、101回展では惜しくも最高入場者数に届かず、というところでした。なお、名古屋展と関西展も本展と同じような入場者の経緯を示しています。※巡回展報告参照。また支部活動では、宮崎支部（徳丸晃支部長）が新たに誕



▲ギャラリートークの様子

生しました。

広報では、X（旧ツイッター）に加え、101回展より白日会のインスタグラムを開設しています。また102回展よりB2判ポスターは廃止し、リーフレットの裏面がポスターとなっておりませんが、そちらをポスター（A3判）とします。また本会報も残念ながら今回をもって印刷紙面として配布することを辞め、装いを新たに会報的な発信を電子版としてホームページで行う方向となりました。（なお、令和元年からの毎年の会報は、ホームページに掲載されておりません。）

今の時代の要請の変化と財政上の問題を抱えており、同

巡回展報告

※夏の総会より

名古屋展

中部支部長 小林 克敏

令和7年4月8日(火)〜13日(日)

愛知県美術館ギャラリー

第101回白日会名古屋展のご報告をさせていただきます。

今年は昨年の創立百周年記念展から次の百年をめざす1

年目としての101回展となりました。質の高い巡回選抜作品が6点増えたことにより、昨年より全体の作品数も増え、よりいっそう充実した展覧会になりました。

展示では、中谷先生、寺久保先生からご指導をいただき、東京展での展示イメージを大切にしつつ名古屋展らしい展示空間となりました。

初日に共催の中日新聞社の取材があり、翌日の朝刊に展覧会情報が掲載されました。内閣総理大臣賞を受賞された作品について中谷先生ご本人が取材記者に解説して下さり、また本会の傾向や現状なども丁寧にお話していただきました。おかげさまをもちまして翌日に掲載された記事の内容がとても充実したものになりました。

東京展では中山先生を顕彰する部屋がありました。名古屋展では中山先生の作品が展示されなかったこともあり、中部の会員や観客から残念に思う声が多く聞かれました。

とはいえ展覧会に対する観



▲名古屋巡回展 授賞式の様子

客の評判も良く、「レベルの高い白日会」との認識が定着してきていると実感いたしました。「名古屋での白日会展を毎年楽しみにしている」という方も多く、今後も支部の全員がより良い作品を出品できるように心がけていきたいと思っています。

開会式には斎藤秀夫会長代行、山本真輔副会長、常任委員の伊藤晴子先生、中谷晃先生、寺久保文宣先生のご臨席を賜りました。

昨年はレセプションを開催しましたが今回はとりやめとし、展示を終えたあとで会員間の親睦をはかるため、中谷先生、寺久保先生をお招きし、一般出品者も含めて懇親会を開きました。両先生から有意

義な説話もあり、白日会への帰属意識が高まったように思えます。

今年には会員への推挙2名・準会員への推挙4名がありました。会友の推挙はありませんでしたが、毎年、実力のあつた新人・若手が増えていくことは好ましい傾向で、大学を出て初出品で初入選したり、賞候補となったりしており、今後に期待したいと思えます。(絵画の一般出品者23名、入選19名のうち初入選は3名でした)

ただ、中部支部も高齢化は進んでおり、逝去、高齢による退会・活動停止する方が増えました。この傾向は今後も続くと思われませんが、新人・若手の活躍を期待しつつ、支部会員一同、新しい時代に向かって頑張りたいと思えます。

支部長が変わりましたが、常任委員の先生方はじめ前支部長、中部支部役員のご支援により例年と同様に開催することができましたこと、心から感謝しております。

関西展

常任委員・関西支部長 池田 良則

令和7年6月4日(水)〜10日(火)

あべのハルカス近鉄本店ウイング館8F

近鉄アート館

まずは、関西支部の7月の総会で、支部長を私から川畑太君が引き継ぐことになりましたので、ご報告いたします。関西支部は現在120名近くの支部員がおり、大阪の近鉄百貨店で巡回展が開催されております。ありがたいことに関西からの出品者が年々増えております。巡回展は本展からの選抜者と関西支部員の入選作や出品者の全てが展示されるのですが、近鉄百貨店のアート館のキャパシティは限られており、支部員の増



▲関西巡回展 ギャラリートークの様子

加により近年では関西支部の出品者は前後期と分けて展示し、一昨年はそれでも並びきれませんでした。しかし今年の第101回展では本部の方のご配慮で巡回作品を減らしていただき、そのおかげで何とか収まることになりました。

関西支部は、大阪、京都、滋賀、奈良、和歌山、兵庫の2府4県と、非常に広範囲に亘っております。なかなかお互いに顔を合わせる機会が少なく意志の疎通が難しいというのが現状ですが、百貨店で開催することもあつて、白日会の人気度、認知度が前よりも上がっております。また百貨店での開催では入場者数が大変重要となり、支部員の皆さんが一軒一軒足で回って、例えば画廊さんや画材屋さんに行つてチケットを配つて頂き、チケットが減つていたらまたつけ足しに出向き、そういう細かい配慮を行った甲斐もあつて、ありがたいことに去年よりも入場者数が増えました。また巡回展の開催場所が大阪の阿倍野であり、滋賀

県や兵庫県から来ていただくのが少し難しい地理的位置でもありますので、それを考えますとこうして入場者数が増えたというのは非常にありがたいと思います。

最後になりましたが、関西支部も新しい支部長となり役員も刷新します。来年はさらに盛り上がった白日会展となればと思います。ありがとうございました。

選抜展報告

◆第3回 白翔会展

令和7年4月9日〜15日(名古屋展)

松坂屋名古屋店

令和7年5月28日〜6月3日(上野展)

松坂屋上野店

◆第15回 白日会会員選抜展

令和7年6月4日〜10日

あべのハルカス近鉄本店

◆第36回 明日の白日会展

令和7年8月13日〜18日

日本橋高島屋

◆第12回 白日会デッサン展

令和7年10月24日〜11月8日

永井画廊

◆第50回 三越会員選抜展

令和7年12月24日〜29日

日本橋三越本店



第101回白日会展 受賞者推挙者一覧

※は101回展より新設

特別賞

内閣総理大臣賞 中谷 晃 (絵画) 千葉
文部科学大臣賞 原 太一 (絵画) 千葉
SOMPO美術館賞

中澤弘光賞 小野 彩華 (絵画) 神奈川
金光 緑 (絵画) 東京
富田温一郎賞 千村 さく子 (絵画) 神奈川
(副賞 マツダ賞)

吉田三郎賞 野添 浩一 (彫刻) 鹿児島
伊藤清永賞 木原 和敏 (絵画) 広島
平松讓賞 小河 美智子 (絵画) 東京
中山忠彦賞 吉住 裕美 (絵画) 埼玉
\* 会員賞 宮本 絵梨 (絵画) 東京
八咫鳥賞 伊藤 晴子 (絵画) 東京
大塚 節夫 (絵画) 静岡

第51回展会友推挙

会 賞

白日賞 佐藤 博美 (絵画) 熊本
(副賞ホルベイン賞)

白日賞 藤松 空良 (絵画) 埼玉
(副賞クサカベ賞)

準会員奨励賞

久保 君代 (絵画) 大阪
(副賞 シュミンケ・ラファエル賞)

会友奨励賞

奥平 英二 (絵画) 三重
(副賞 平澤篤賞)

会友奨励賞

大村 利朗 (絵画) 静岡
佐藤 晴美 (絵画) 広島
新保 智子 (絵画) 神奈川
田中 滉人 (絵画) 熊本
松平 一民 (絵画) 山形
松本 多恵子 (絵画) 千葉
山路 敏貢 (彫刻) 大阪
一般佳作賞
一般佳作賞
一般佳作賞
一般佳作賞

法人寄託賞

【百貨店賞】

近鉄百貨店賞

高島屋賞

大丸松坂屋百貨店賞

【画廊賞】

梅田画廊賞

大有美術賞

美岳画廊賞

ギャラリー大井賞

瀧川画廊賞

● 会員推挙

【絵画】

井口 民子 神奈川
伊藤 英二 北海道
内山 みち 三重
大塚 節夫 静岡
小野 彩華 神奈川
神尾 昌義 静岡
久保 君代 大阪
小松原 壽 岡山
鈴木 康子 和歌山
鈴木 陽子 千葉
千村 さく子 神奈川
長 和義 栃木
西田 佳世 熊本
蜂須賀 仁 愛知
藤井 佳奈 神奈川
山下 保美 栃木
山根 かほる 山形
佐々木 シュウジ 大阪

【彫刻】

● 準会員推挙

【絵画】

阿部 充子 神奈川
井尾 和廣 大分
伊藤 春樹 長野
苛原 治 神奈川
江川 和之 長崎
大村 利朗 静岡
奥平 英二 三重
川畑 昭子 宮崎

【彫刻】

久保 敦嗣 埼玉  
窪田 紀子 大阪  
車戸 優子 岐阜  
見城 康祐 神奈川  
光華 みつこ 兵庫  
佐藤 博美 熊本  
高森 圭子 千葉  
多賀谷 寛 宮崎  
武田 誠好 長野  
友利 郁也 東京  
仁木 聖子 北海道  
幅 宏二郎 愛知  
平松 周 愛知  
藤森 好広 大分  
二木 ゆき子 山口  
該当者なし

●会友推挙

【絵画】

出田 茂典 兵庫  
今地 輝武 栃木  
大崎 美和子 北海道  
下城 賢一 熊本  
新保 智子 神奈川  
高木 佳世子 神奈川  
辻 登代子 奈良  
藤松 空良 埼玉  
本田 恵子 東京  
増田 茂子 長野  
松平 一民 山形

【彫刻】

松本 多恵子 千葉  
柳原 真由美 宮崎  
山路 敏貢 大阪  
割石 利子 神奈川  
該当者なし

特別賞審査員

内閣総理大臣賞 瀧 悌三先生  
文部科学大臣賞 土方 明司先生



賞について

白日会では、特別賞・会賞・法人寄託賞の三部門があります。これらの内容と選考についての詳細は、目録と図録、ホームページに掲載させていただきますので参照ください。ここでは一部トピック的なことをご紹介いたします。

「白日賞」は公募展となった第2回展より設立され有望新人に与えられる賞です。ちなみにその時の受賞者は、絵画は佐分真と橋本八百二、彫刻では松田尚之という後世に名を残すことになった当時の若手作家です。「会賞」の中核となる賞で、一般出品者と会友が対象となります。白日賞を指す新規の方の応募を期待しています。

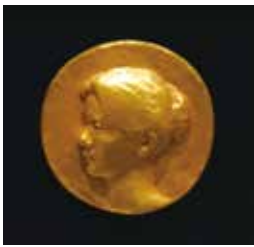
毎年申請予定の「内閣総理大臣賞」と「文部科

学大臣賞」は、現在美術評論家の瀧悌三先生と土方明司先生に選考をお願いしております。陳列日に両先生がおいでになり、絵画と彫刻の全ての展示作品を授賞の対象として、過去に受賞した方が重複しないという条件のみで、先生方に選考をお願いしています。

なお、大臣賞を除く「特別賞」と「会賞」には、賞状の他、メダル(吉田三郎賞には盾)が授与されます。伊藤清永先生のメダルに加え、101回展より中山忠彦先生のレリーフからメダルを作成しました。「会賞」には中山先生のメダル、新設された「中山忠彦賞」には同じメダルの入った盾が授与されました。

法人寄託賞には、「百貨店賞」と「画廊賞」があり、百貨店賞は各百貨店の美術部の方が陳列日に来場され展示会場を觀て自身で選考します。また画廊賞は当会に選考を委嘱されている画廊賞と、画廊主が自ら陳列日に来られて直接選考する賞があります。

白日会の授賞制度は、作品の内容や水準や美学に対して、会の評価と外部の評価の両輪を併せ持っています。それはお互いに重なることもあれば重ならないところもあります。しかし白日会ではそのことも総体として良いこととしています。



▲中山忠彦先生作のレリーフ「永遠に」(特陳作品)

受賞作品紹介

特別賞

内閣総理大臣賞

中谷晃



瑞光の庭園  
F 100

文部科学大臣賞

原太一



アート・セッション  
130.3 × 324cm

SOMPO美術館賞

小野彩華



昼下がりの画室  
P 80

中澤弘光賞

金光緑



寂寥  
F 80

富田温一郎賞 (副賞マツダ賞)  
千村さく子



至福の時  
F 100

吉田三郎賞

野添浩一



Next Lesson  
124 × 38 × 45cm

伊藤清永賞

木原和敏



story  
P 100

平松讓賞

小河美智子



室内静物  
F 60



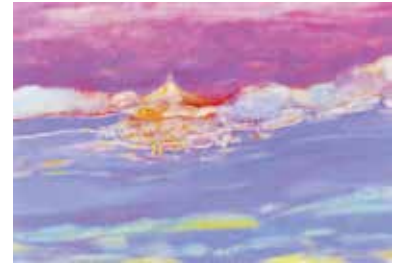
里山へ続く私の散歩道  
F 100

八咫鳥賞  
大塚節夫



Faithful  
F 80

八咫鳥賞  
伊藤晴子



Merry-go-round  
P 100

中山忠彦賞  
吉住裕美



二ヶ月前  
F 100

白日賞 (副賞クサカベ賞)  
藤松空良



夜の景色  
F 100

白日賞 (副賞ホルベイン賞)  
佐藤博美

会賞



Ave Maria  
F 100

会員賞  
宮本絵梨



望洋  
P 120

会友奨励賞 (副賞平澤篤賞)  
奥平英二



風に吹かれて…  
134 × 36 × 36cm

準会員奨励賞  
佐々木シユウジ



私はここにいる  
F100

準会員奨励賞  
(副賞シユミンケ・ラフアエル賞)  
久保君代



流木のある風景  
F 120

一般佳作賞  
新保智子



橋の見える丘  
P 80

一般佳作賞  
佐藤晴美



輝く山  
F 60

会友奨励賞  
大村利朗



一般佳作賞 松本多恵子

新たなページ  
F 60



一般佳作賞 大丸松坂屋百貨店賞 松平一民

宗像三女神  
F 100



一般佳作賞 田中滉人

街  
F150



高島屋賞 山本大貴

春昼  
M 30



法人寄託賞 【百貨店賞】 近鉄百貨店賞 菊井あきゆき

玄冬の放生池  
F 100



一般佳作賞 山路敏貢

は・ば・た・き  
F 100



大宥美術賞 佐藤陽也

呼福  
P 150



【画廊賞】 梅田画廊賞 長船善祐

漁夫  
91 × 182cm



大丸松坂屋百貨店賞 国本青山

宙に迷う  
P 100



瀧川画廊賞 友利郁也

Brume de Rêve 『夢の霧』  
M 100



ギャラリー大井賞 中野淳也

中将姫  
F 100



美岳画廊賞 坂西涼羽

商店街  
F 150



五十年に亘って在籍された方に授与される八咫鳥賞。この度受賞された絵画部の二名の方は第51回白日会展にて会友推挙となりました。受賞者の皆様へ受賞にあたり思い思いの内容でと、ご寄稿をお願いしました。

### 伊藤晴子（顧問） 51回展会友推挙

「白日会と私」

今年の第101回白日会展で八咫鳥賞を頂き、夏の総会で常任委員を卒業し顧問という肩書を頂戴しました。もう随分と長い年月を白日会にお世話になったものと感慨深い昨今です。

私が白日会に初出品したのは1955年小学5年生の時でした。当時の白日会は全くのアマチュアや私のような小学生でも入選出来るような弱小な日展参与団体でした。小5から中2まで出品した後、高校や大学受験 大学卒業後の留学結婚等があり、再び出品したのは長女が1歳を過ぎた1974年です。二人の娘の育児や元夫の仕事の手伝いで思う

ように描く時間が取れない中、父のような絵描きになりたいと必死で白日会と日展への出品を続けました。

日本橋三越での第16回白日会会員選抜展に選抜された頃は30人程の出品者で各々30〜50号の作品を並べました。私は初めての選抜に緊張し酷い作品を父に見せましたら「こんなものしか描けないなら辞退しろ」と言われ、モデルの衣装もポーズも変えて1週間で50号を描き「やればできるじゃないか」と言っても「ええ、ええ、喜びと安堵感を今も鮮明に覚えていています。」

1980年代には前会長中山先生と同年代の東京藝大の先輩方が何人か白日会に参加され、その先生方の優秀な学生さんたちが沢山出品されるようになって、現在の白日会の礎となりました。現在の白日会は多くの素晴らしいプロ作家を擁し、又プロを目指す若い方達の憧れの公募団体となりました。

102年の長い歴史の中、御指導下さった先生方先輩方やお互い切磋琢磨しあつた仲間たちに恵まれて、瞬く間にその半分ほどの年月を過ごしてきました。

あと何回出品出来るか分かりませんが、ずっと白日会の一員であったことを誇りに思い一杯描き続けていきたいと思っています。

### 大塚節夫（会員） 51回展会友推挙

「八咫鳥賞を受賞して」

八咫鳥賞、有難うございました。都立工業高専を卒業して就職、赴任したのが裾野市（当時は町）でした。寮生活の余暇に始めた絵画、その頃大石靖先生と知り合い教室に通いました。そして白日展の存在を知り、初入選したのが第47回展でした。教室では展覧会やスケッチ

旅行や色々な楽しかった思い出があります。なかでも運命の人と出会ったことです。そして先生の仲人で結婚しました。その時私と妻は共に30歳でした。41歳のとき会社勤めを辞めて画家の道をゆくことにしました。幸運なことにそごう百貨店が個展を企画してくださり以後毎年個展を開いてくださいました。そごう百貨店が撤退した時は重要な発表の場を失いどうしようかと困惑しました。しかし幸いなことに国立沼津工業高専から美術講師をやってくださいとの声がかかり、勿論喜んでお引き受けしました。60歳から70歳までの10年間若い学生たちと楽しく過ごしました。

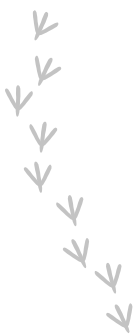
今や80歳になり、この道をゆくことを後押ししてくれ、ずっと一緒に歩んでくれた妻は数年前から要介護5と認定さ

れ、私は介護の毎日です。介護に時間をとられ、なかなか自由な時間を作れないのが悩みです。私自身も心原性の脳梗塞を患い、幸い後遺症は無かったのですが定期的に通院しなければならぬし遠出にいくのです。

今回の授賞式をはじめは欠席しようかと思っていました。たまたまディサイビスの日でしかも時間延長が可能とのことで出席することができました。

2010年 残念ながら大石先生は逝去されました。先生のご健在のうちに会員になりたいと思っていました。が果たせず、この度遅ればせながら会員推挙を受けることとなり喜ばしく思っています。「驚馬も十駕するは、功、捨てざるに在り。」これからも諦めずに一步一步精進し続ける所存です。

※会報発行の遅れにより年をまたいでしまいましたが、令和7年にご寄稿いただいたご文章のまま掲載いたします。



ことの葉

白日会の先達の言葉を紹介する「ことの葉」。今年、伊藤清永先生の没後25年を迎えます。伊藤先生が90歳で逝去されたのは、平成13年(2001)の6月です。その1年半前の「文藝春秋」新年号に掲載され、自分の責任として報恩の証として言い残さねばと執筆された遺言のごときご文章です。尚、洋画家・白日会会長として執筆されています。

明治44年 兵庫県出石市生まれ  
昭和8年 第10回白日会初出品・白日賞・会友推奨  
昭和10年 東京美術学校西洋画科卒・翌年、文展で推奨受賞  
昭和22年 日展特選受賞(翌年も特選受賞)  
昭和59年 日本藝術院会員となり翌年に白日会初代会長となる  
平成13年 白日会第77回展後に90歳で没す  
初代白日会会長・日展顧問・文化功労者・文化勲章

『文化勲章画伯 日本美術界を告発する』

なぜ日本の絵画は世界に通用しないのか。  
断腸の思いで語る腐敗の実態

伊藤清永

(洋画家・白日会会長)

私は今年で数えて九十歳になります。兵庫県出石町の禅寺の三男に生まれ、父親から僧侶としての修行を厳しくしつけられて育ちました。ところが中学四年で画家を志し、親の大反対を押し切って東京美術学校



(現在の東京芸大)に進みました。当時、油絵を描くのは裕福な家庭の子弟が殆どだった中で、絵の具一本満足に買えなかった私が、ずっと絵を描きつづけてきました。戦争にも二回召集され、家族を満足に食べさせることも出来ず苦労した時代もありましたが、今日まで絵を描いてこれたのは、本当に多くの方々を支えられ、助けられてきたお蔭だと思っております。

ですから、この歳になって考えるのは、絵画の世界に対する自分の責任をいかに果たすべきかということです。いま日本の美術界は世界に例を見ない、極めておかしな状況になってしまいました。そのことに対して、やはり自分なりに言うべきことを、きちんと言い残しておかねばならないと思つた次第なのです。

ご存じない方もあるかも知れませんが、日本はいまや世界でいちばん油絵の盛んな国です。世界中の油絵人口を足したよりも、日本の油絵人口の方が多いいと思います。美大以外に課目の中に入れているところまで含めると、油絵を教えている大学・短大が百近くもある。さらにその入学準備のため

の研究所のようなものが、これまた百近くあり、さらにカルチャーセンターなどが大盛況です。なぜ、これほどまでに油絵を描く人が多いのか、そのことだけでも、不思議な現象なのです。

では底辺が広がることで、いったい何が起きているか。それによって日本の油絵のレベルが底上げされ、世界に認められるようになったのであれば、喜ぶべきことでしょう。ところが現実には、それとは全く逆の現象が起きている。プロとアマチュアの区別がなくなつてしまつたのです。

例えば現在の東京都美術館は美濃部知事の時代に出来たものですが、「都民の税金の出来たものだから、この美術館は都民のものだ」といつて、やたらと何でも受け入れるようになってしまいました。私たちが全く知らないような絵の団体、これまた大変な数が出てきているのですが、これらの展覧会で東京都美術館の予定はびつしり埋まっています。おかげで日展をはじめ、それまで使っていた私たち公募団体の展覧会はみんな会期を削られてしまいました。そのためか美術館を使用する展覧会にカルチャーセンターで絵を描いているような人たちが出展したがる。ですから、どの団体の会員も大部分がアマチュアです。それが日展にも応募してきて、入選すると喜んでけっこう威張っている。

そのうち、本当のプロもそのような団体のトップに立つようになる。そうすると絵が売れなくても食えるからです。この春に、



日展にも出品している団体のトップ争いがある、私に仲裁を頼んできたことがありました。同じ絵描きであるお二人を目の前にして、そんな生臭い話をするなんて嫌なことです。なぜトップ争いなど起こるか考えたら、やはりトップに立つことで食べるからなのでしょう。では、その団体の中心がどれ程のものかといえば、会員の大半は地方のお金持ちの奥さん方です。それでも一応、公募団体であり、社団法人であり、絵描きとして通用しているのです。他の国ではとても考えられないことです。

日展の深刻な危機

いまのプロという人たちと、私たちがプロになりたいと志したときの意識そのものも、全く違つてしまつています。内輪の恥をさらすようで心苦しいのですが、日展のレベルも昔とは比較にならないほど低下してしまいました。その年の日展で総理大臣

賞をもらった者は、次の芸術院賞の推薦を受ける資格がとれるということにしている団体が多いのですが、油絵の中にはこれなら大臣賞にふさわしいという作品がなくなりました。みんなどんぐりの背比べなのです。

ですから先日、日展の受賞者が挨拶に来ましたが、私は絶対に「おめでとう」とは言いません。本当の話をしました。「あなたの絵がいいから選ばれたのではない、他に賞をあげるべきものがなかっただけのことだ。来年の日展まで一年間ある。それまでの間に、自分は本当に大臣賞にふさわしい作家だと思えるように、真剣に勉強し直してくれ」と。いまはそんなことを言う者もいなくなりました。甘やかされて、それでも食えるからなのでしょう。

いったい、いつからこんなことになってしまったのか、不思議で仕方ありません。これだけ絵画人口が増えて、これだけレベルが低下してしまうとは。

昔の帝展に私が初入選したのは昭和八年、二十二歳のときです。すると今では考えられないことですが、私の母校である愛知中学（現在の愛知学院大学）の先生方数人が、絵の具代にと、私の絵を買って下さり、そのお陰で学校卒業まで絵の具代には困りませんでした。美術学校卒業の翌年二十五歳で選奨（特選）になりましたが、当時これは大変なものでした。直ぐに日仏交換留学生に推挙されましたが、日中戦争で取り止めに。残念がっていたところ、親

しくしていた山田耕筈先生の勧めで、昭和十二年に初めて沖繩へ写生に出掛けたときには、港で記者たちが何人も待ち構えていて、新聞に四段抜きで「特選作家 伊藤清永先生来島す」と大きく報じられたほどでした。

当時の官展特選はそれほど大変なことだったのです。それがいまでは、大きな意味での美術界にとって、日展入選などまったく値打ちのないものになってしまった。とはいえ、この人たちの中に、次の世代を担うべき若い作家を期待しなければならぬのです。

つまるところ、これだけ油絵人口が増えたために、プロがプロらしい仕事をしなくても、アマチュアを相手にするだけで威張って食べていけるようになったと言えます。また、昔のような貧乏もなかったか、本当の芸術を育てられるような金持ちもない国になってしまった。ただ、どうにか食えるという社会だから、作家はどうあるべきかという反省も薄れたのではないか。これは絵描きだけの問題ではなく、どの仕事、どの立場でも自分を見失っていることがあるのではないかと心配しています。

#### 金の計算しか考えていない

絵の世界で言いますと、たとえば、絵の具一つを例にとつても、我々が使っている絵の具には、実はかつてのような本物が殆どないのです。絵の具の原料には、同じ緑でも青でも色々種類がある。比重の違いや

透明度の違いがあり、印象派から印象派以後までは、その使い分けで空間を出せたり、遠近感も表現できた。ところが、いまの絵の具ではそれが出来ない。材料がまるで違ってしまったのです。

ですから、フランスやイタリアの名門の絵の具屋は、もう原料がないから責任をもちませんといつて、殆ど廃業しています。ところが日本だけは、同じ名前で売っている。油絵人口が多いものだから、何をいくら作っても売れる。潰れる絵の具屋など一軒もありません。

もつとひどいのは画商です。東京だけで画廊が千何百軒もあるでしょう。これだけの数が潰れずにいるのですから、日本は不思議な国です。

私が会長を務めている白日会には、近年若手の仲間が大勢参加しております。ほとんど芸大の卒業生で、他の団体とは大きく違います。日展に芸大の卒業生が作品を出している団体も、白日会ぐらいのものです。

しかし、いまの日展で入選・落選を心配するようなのはプロではないと、私は若手たちに言っております。ところが、画商たちは「白日会の若手を掴むことが生きる道だ」

などということをして、私に向かつてはつきり言う人もいます。他の国のように、優れた美術品は民族の宝だという考え方が一般にないのではないかと心配します。金の計算しか考えていない。本当にこのままでは日本はおかしくなってしまう。

実際に、白日会の若い絵描きで、早くか

ら画商がついて、いい気になっている者も一部あります。私はそういう幾人かに言っているのです。「画商がついたからといって大きな顔をして欲しくない。若いうちに画商が喜ぶような絵を描いて、将来どうするんだ。そこで人生終わるつもりか」と。

そういう絵は家具を買うのと同じような感覚で買われていたり、将来に値が上がるだろうという投機だったりする。

画商の考え方も変わってしまったかもしれません。私が四十年近く前にオランダの美術学校に世話になり、後にパリに戻ったときのことを思い出します。カーンワイラーさんという大変な近代絵画の評論家であり、ピカソの画商でもある方が、あるとき私の絵を見て「日本からたくさん絵描きが来るけれど、お前だけはヨーロッパと日本のミックスだ」と褒めてくれた。当時、日本では私の絵は非常にバタ臭いと言われていたのにはです。

ところがその時、藤田嗣治のことをカーンワイラーさんは厳しく批判するのです。「戦後のフジタはいただけない。一点も売られていない」という。その前に私は山田耕筈さんから藤田さんに渡して欲しいと託されていた包みを持って、当時はパリではなく郊外に住んでいた藤田さんを訪ねていました。わしの仕事を見てくれ、と言われてアトリエに通されたのですが、かつての藤田さんの仕事を知っていますから、見る影もなく、とても淋しい思いをしました。それなのに、ある日本の画商が内緒でそれを

引き取って、以前と同じように高い値段で日本で売っていたのです。

カーンワイラーさんは私に、パリに残れと言われました。六、七年かかるが、そうしたら食べるようになる、という。彼らの「食べる」というのは意味が違います。世界市場でのことですから。

当時、私には本当の画商魂を持っていて、私の絵だけを扱ってくれていた人が日本にいたのですが、私のパリ滞在中に倒れて亡くなってしまった。そういう方でもおられたら方法はあったかもしれませんが、私は貯えもありませんし、家内が心臓病で今のような医療の方法もない時代です。そんな中でぎりぎりまで節約して勉強していったので、そのまま日本へ帰りました。

オランダを離れる日に、この美術学校で同じように世話になっていたアメリカの彫刻家から「ここで描いた絵をどうするんだ」と聞かれて、持って帰ると言ったら「ここで描いたものを、どうしてここで見せずに持って帰るのだ。自分が学校と交渉するからここで展覧会をやる」と言われ衝撃を受けました。それが本当の世界というものなのです。私は画家として誰にもひけをとらないほど、正しく過ごして来たと思っっています。それだけに、その場所で描いたものはそこで見せるという世界の常識を突きつけられたことは、四十年たったいまでも忘れられません。

って世界美術の中心はパリでした。しかし、いまはわかりません。いったい何を勉強しようというのでしょうか。日動画廊をはじめパリに店を持っている銀座の画商が数軒あります。日本のデパートも何軒か店を出している。ところが、せっかく店を出しているのに、日本人の絵を掛けていない。これはとてもおかしなことです。私はその社長に「もっと日本のブランドを持って下さい」と言ったことがあります。彼らは向こうの印象派以後の作品を大量に日本に入れて、フランス政府から勲章まで貰っているけれど、日本人の作品は一点も置いてないはずですよ。こんなおかしな話があるでしょうか。どうか、自分たちが大事に育てている日本人画家の絵も向こうに持って行って、国と国の本当の文化交流をして欲しいと願っています。

ある百貨店は、パリで大がかりな日本人の絵描きの展覧会をやるがあります。必ずポスターも作り、レセプションもやります。ところが、その後一点もパリに作品を置いてくるわけではなく、帰朝報告展と行って東京の本店でまたやるのです。ひどい場合は、その費用まで作家が持っていることもある。つまり、パリで展覧会をしたという箔をつけて、日本人に絵を買わせるためのものになってしまっているのです。さらに日本の場合、非常に困るのは、画商が売値を保証して売るといことです。どの仕事でも本来、評判が悪くなれば値段が下がるのは当たり前です。世界中どここの国でもそうです。ところが、日本だけが、画商が一度値段を上げると、二度と下げないんです。そのために、私は非常に困りました。かつて五都展（名古屋・大阪・京都など）というものがあつた。画商たちが絵を公開入札していました。公に値段がわかるわけですが、そこで私の描いた裸婦像をべらぼうに高い値段にされてしまったのです。そのために周囲の態度が、兄弟のように仲良くつき合ってきた絵描きまで、嫉妬してガラツと変わってしまったほどでした。

しかも、高い値段をつけても売れなければ、下げてくれればいいのに、それもしない。仲間とのことでは辛い思いをしました。

### 世界に目が向かないマスコミ

九九年は白日会創立七十五周年でした。そこで、ノルウエーのオッド・ネルドルムという五十五歳の画家の特別出品をやるという事になった。この人はオスロにいながら、ヨーロッパでもアメリカでも引っぱりだこの、最近で最も認められた作家の一人です。こちらから二、三人ほど挨拶に行かせたら、作家自身も彼の画商も感動したらしく、向こうの新聞に載って、大変な大作を日本に送ってきてくれました。なぜ、ノルウエーの画家を選んだかという、かつてパリ中心の時代に活躍したのフランス人ではなくイタリア人作家だったのですが、彼らは外形を重んじる。だが、北の国の作家はノルウエーのムンクにして

もロシアのシャガールにしても中身いいますか、精神性を重んじるところがある。我々東洋人は外形でなく中身で選ぶのが常識です。それでノルウエーの現代作家を選んでわけです。

レセプションで、ネルドルムの画商に話をしてくれと頼んだのですが、すると実に専門的で厳しい話をしてくれた。出席した画家たちは、そんな話をかつて聞いたこともない。みんな感動していました。

ところが、せっかく世界的な素晴らしい画家の絵を持ってきたのに、NHKが美術番組で簡単に報じてくれた以外には、日本の新聞は一行も書きません。その後、信頼すべき朝日新聞がノルウエーでは二流でしかない画家の展覧会をやっている。本当に世界で評価されているものには目が向かないのですから、これも不思議な話です。

かつて戦前の朝日は、帝展に出品した絵であっても、三面トップ記事で「これはデユフィの模写だ」と叩いたことがあったのを、今でもよく覚えています。その記事の批判によって、作家は社会的に葬られました。そういう例もかつてはあったのです。

日本だけの狭い世界に閉じこもって、きちんと世界に目を向けていない。まさに美術の鎖国状態です。徳川時代にはそれで独自の都市文化を生み出したけれども、いまはそれもありません。

日本画の場合も問題は同じことではないでしょうか。日本画の場合、なぜか画料が洋画の十倍もの相場と決められています

で、もつと楽に食べていきます。しかし、いまの日本画は側に寄って見なければ誰の絵かもわからないようなものが多い。独自の世界を持つておられるのは高山辰雄先生をはじめ一部の方々だけです。東山魁夷さんなどは、その影響力が強すぎたために、かえって弊害も招いてしまったように思えてなりません。東山さんに似たような体裁の絵が非常に多いのです。しかし本来、東山魁夷の絵は東山さん自身の一点だけではないはずです。

私にはイタリアに留学していた絵描きの娘がいるのですが、それが私の絵にどんなに似てくるのです。これはいかんと思いついて、家から出させました。親子の情でいえば、私のアトリエは大きいですし、これ以上どんなに長生きしたって使い切れないほど材料も持っています。親子で描くなら、そのままにしておけばいい話です。しかし、絵の世界というものは、この世に二つ同じものなどいないのです。ですから、娘も借金だらけになって自分のアトリエを建てました。それでもわざと知らん顔をしております。本当に作家になるということは、そうあるべきだと思いますし、私自身なぜこんな道を選んだか、今も後悔しています。かつて東京美術学校の入学式で、正木直彦校長が「お前たちがこの学校を卒業してから、その一割が美術界に貢献してくれば本望とする」と訓示されたことを、今にして思い出します。しかし、実際には一割もなかなか残れない。芸術とはそのくらい

厳しい世界なのです。

この歳になりますと、何かをしなければという責任を負うのです。そのくせ、自分の絵とは何だろうと反省もする。これじゃだめだとも思う。そうかといって、いままでもやってきた勉強を否定は出来ないし、かといって完成したわけでもない。昨年から、私のパステルで、文士や詩人の文章をつけて一冊の本にしようという企画があります。日本ではパステルというものを簡単に考え水彩やデッサン程度にしかあつかっておりません。でも世界市場に行きますと、ルドンやドガのように油絵以上に高いパステルがあるのです。ところが日本ではそれを考えようもしない。これだけ絵の好きな人が大勢いるのに、本物を知らない。しかし、私はパステルだからと簡単に描くことは出来ないし、依頼を受けて丸二年、いまだに枚数は揃いません。そういう作家魂というか、何か責任があるのです。

一体いつから、どうして日本はこんな国になってしまったのか。工芸でも、デパートであまり高く売れないような茶碗が、お茶の家元が箱書きしますと、何倍にもなる。そんな国が他にあるのでしょうか。

それが近頃、私の絵を持っていく古い方までそういう意見の人が出てくるのです。本当のいい絵というものは、作家のサインなどなくなつていいわけです。それがサインがあつてもだめで、裏書きをしてくれという依頼がある。どうしてこんなことになったのか。結局のところ、本当に自分が良

いと思つたものを信じてることが出来ず、ブランドを欲しがるといふものなのか。

パブルのときなどは、いろんな企業が印象派以後のものを買い集めて、例えば日本にはモネの絵が多い。その作品はパリではいくら、ニューヨークではいくら、とすぐ相場がわかる世界なのに、日本人はそれに輪をかけて高い値段で買って、世界市場で大変な響きを買っているわけです。今度はパブル崩壊でそれを売らなきゃいかんとなると、半値でも売れません。

戦前、本当の金持ちがいた時代には、こんなことはありませんでした。例えば大原孫三郎は、児島虎次郎という同郷の画家を後援してパリへ留学させた。そして、「お前がいいと思つた絵を買って来い」といつて、絵描きが純粹にいいと思つた絵を選ばせて集めた。それがいまの大原美術館です。

それと前後して、松方幸次郎という方が大量のヨーロッパの絵画や彫刻を集めているんです。そのうち日本に持ちかえつたものを、旧東京府美術館の半分を使って並べていた。昭和初期に私は現実にそれを観ています。その後、戦争になって、パリに置いてきた作品が敵国財産で差押えられてしまった。それが返つてきたものが、いまの国立西洋美術館です。ロダンの彫刻などは、みんな松方コレクションなのです。

福島繁太郎という人が長くパリに滞在し、ルオーと親交を結び、相当の近代絵画を持ちかえつたのが昭和五年頃。これを初めて観たときの私のショックは大きく、母

の作つてくれた唯一の着物を質に入れて通いつめ、暫くは絵筆を持たなかつたものです。

### 日本に文化政策はあるのか？

先程、パリには何もないと言いましたが、日本よりはましです。莫大な税金を使って、公共事業と称して闇雲に道路を作つたり、国中の河川をコンクリートで固めてしまつたりするようなことにフランスは金を使わないでしょう。その代わりに、いまだに新しい美術館を作っています。オルセー美術館などに行くと、昔行つたときとまた違う。建物は同じでも、中身がちゃんと充実している。さらにまた、新しい美術館も作つているし、かつて著名だった作家の住んだ家などは国が買い上げて保存している。そういうことが税金で出来る国です。

ところが日本の場合だと、単に予算を消化しているだけで、芸術の意義を理解しようとしていないのではないかと、首を傾げたくなることがしばしばです。

特に地方自治体は、単に予算があるからやっているといるケースが多い。兵庫県の県立美術館を新しく作るのに縁あつて企画委員になりました。新しい美術館が出来たら、古いものは壊すということですが、これも予算があるからというところですが、まずその会議というのが、相当な肩書の人たちを集めていながら、日中にたった二時間しか時間を取らないので、話がなかなか捗ら<sup>はか</sup>ない。その後、阪神大震災で現在の美術館

が被災して、十億円もかけて補修工事をしたのに、まだ同じことを繰り返している。

本来、美術館の命は所蔵・展示している美術品の質です。ところが、日本の場合には肝心の中身よりも箱物ばかり優先される。県立美術館というものの中には、建築家が国際的な賞を狙って、好き勝手に作っているケースがままあるのです。

一方、肝心の絵はどうかといえば、中身は殆ど何もない。その県の関係の作家が寄贈するだけです。あるいは、せっかく一生懸命働いて、美術が好きで作品を集めた方が亡くなると、相続税がかかる。私の場合でも、このまま作品を置いて死ねば、それも相続税の対象になります。結局、全部どこかに寄贈することになってしまいうのです。ですから、兵庫県の場合でも、小部屋をたくさん作れ、寄贈した方の名誉を守れと言ったのです。

そういう作品は玉石混淆だろうけれども、五十年、百年先になったらいいものだけは残る。そうすれば、兵庫県立美術館は立派な美術館になる、建物だけにこだわるなど申し上げたのです。

これは地方自治体だけの問題ではなく、国についても同じことです。美術品の文化庁買上げというものがありますが、これは額縁代にもならない程度の値段でしか買いたい作品しか集めていない。日本には本当の意味の文化政策と言えるようなものは、ないのかもしれない。

世界に例を見ない特殊な文化を持ち続けてきた日本。母親が小さい我が子に民話を聞かせるのも一つの教育だったはずだし、嫁入り前の娘に何かを教えることも、この国の古い伝統でした。それらが一瞬にして無くなってしまったような気がしてならない。その意味でも、いまの日本は文化国家ではないとしか考えられません。

私は子供たちの将来のためにと思い、ささやかですが、郷里で絵のコンクールに入賞した子供たちに、自分でデザインした金メダルをあげています。いまは子供たちが観察すること、表現することを忘れてしまいい、都会では衝動的になる子がいる。これでは本当に将来が心配だから、絵を描くことで何かを見つけてほしい。こういう機会でも作らなければ、じっくり絵を描くこともないだろう、私はそう思って、年一回幼稚園から中学生の子供たちを対象にした展覧会を開くのです。いわゆる児童画の枠にははめません。何も将来の画家を養成しようというのではない。中には観察力や表現が細かい子がいて、これが将来科学者になるかもしれないのです。

私が帝展以来、出品し続けたいまの日展についても自分が最古参になった現在、少しずつではあるけれども、本筋に戻そうという改革の気配がようやく見えてきました。例えば、これまでは特選の絵を同じ壁と一緒に並べられなかった。日展の洋画は、所属する八団体近くがそのお家の事情で推薦してくるので、中にはお寒い作品があっ

たのです。それが今年度からは、特選を全て同じ壁に並べ、同時に審査員の作品も同じ一室に陳列するのです。それによって審査員も選考に責任を持つことになる。今までのように各会配分は出来なくなるでしょう。いまでも天皇皇后両陛下がご覧になり、地方巡回を合わせれば百万人近い入場者を動員する日展の上に立つ者として、作家魂というか、反省が少しでも出来たのは、私の長い年月の記憶の中で初めてですし、嬉しく思います。

今後、我々日本人が本当に世界市場で勝負しようと思ったら、絵画に環境があつてはいけないということを、これまで申し上げてきました。しかし同時に大切なことは、日本人であることを忘れないことです。外国の物真似では通用しません。堂々たる日本人でなければ描けないものを描かねばならない。例えば、梅原龍三郎や中川一政。彼らは晩年、彩墨という中国の絵の具を使って描いている。

私も日本人だからこそ描ける油絵にしたいて描いてきました。ルーブルに行けば、ここだけでいろんな裸婦像があります。が、私は自分の裸婦像を異常な高値にされて以来、随分と悩みながら描いてきました。そもそも日本人は、裸婦像というものを描かない民族でした。明治以来、たくさん裸婦像が描かれるようになりました。が、みんなヨーロッパの真似でしかなかった。なぜ日本女性を裸にして描くのか、という突き詰めた理由が何もなかった。

私はいろいろ考えた末に、日本人ほど肌を大切にしてきた民族はいないということに思い当たりました。日本の作法や道徳は、そもそも肌を大切にすることから発しているのです。それに絞って勉強をやり直し、何十年もかかりました。そして気がついたらこの歳になってしまったのです。

その間、日本の女性もずいぶん変わりました。体型も変わりましたし、肌も粗末にし過ぎるから、荒れてきました。この前の日展に陛下が見えて「久しぶりだね」と仰る。私は陛下に「いまの日本の若い女性は、病気になるまでわざわざ痩せる薬を使う。これでは本当に国として心配です。せめて私の絵を観る人は健康でふくよかでおおらかであつて欲しいと願って描き続けています」と申し上げたのですが、本当にそう思っています。

これまで、ずいぶんと生意気なことを申し上げてきました。しかし、日本の絵画界が世界中でただひとり閉ざされた、極めて異常な状況に置かれてしまっていること、日本が本当に不思議な国になってしまったということについて、やはり自分の責任として、きちんと言い残しておかねばならないと考えた次第です。それは一つの私の報恩の証かもしれません。

伊藤清永「文化勲章画伯 日本美術界を告発する」  
『文藝春秋』第七十八巻 第一号 平成十二年一月一日発行  
180-188頁掲載

## 追悼のことば

## ■丸山 勉（元常任委員）



会員推挙 66 回展

富田賞 66 回展

文部科学大臣賞 85 回展

平松賞 94 回展

令和六年十一月七日退会

令和六年十二月十六日逝去 享年 61 歳

丸山勉元常任委員が一昨年の令和6年（2024）12月16日に大動脈瘤破裂により急逝されました。享年61歳。なお、丸山氏は同年の11月に白日会を退会しており、師を中山忠彦とする丸山氏は、同年9月に中山先生のご逝去をもって一つの区切りとして退会したと語っていました。しかしながら、当会に大きな影響を与え、また若くして志半ばで急逝されました氏を偲び追悼の紙面を割きたいと思いま

す。

丸山氏は昭和38年（1963）栃木県佐野市生まれ、昭和61年（1986）東京造形大学造形学部美術学科1類を卒業し、翌年の昭和62年（1987）の第63回白日会展に初出品しました。以後受賞を重ねながら、平成29年（2017）常任委員となりました。伊藤清永先生が白日会会長であった平成11年（1999）に、日展に初出品し、特選を受賞、日展会員として活躍し、逝去時は特別会員でした。

丸山氏は白日会と日展を拠点としながら、常にアートマーケットに作家生活の基盤を置き、また展覧会企画等も行い活動を続けてきました。平成18年（2006）

より開校された「中山アカデミー in 蓼科」で中山忠彦会長の元、若手専門の講座を担当開校し若手を育成、また若手をアートシーンやアートマーケットでの実践に誘いました。白日会の中ではホームページの開設や後の法人寄託賞となった画廊賞の斡旋、アートシーンで活動する作家の勧誘や指導を行いました。美術界でも会の中でも風雲児的であり、丸山氏でしたが、多くの若手を実践的に育成し、白日会や日展そして美術界に一石を投げ続けました。ここでは丸山氏に薫陶を得た白日会の若手作家を代表し4名の作家に追悼文を寄稿していただきました。

## 「追悼 丸山勉先生」

今井 喬裕（会員）

白日会が若手にも優しい団体であることはよく知られていますが、とりわけ我々の世代が一番お世話になったのが丸山先生でした。誰に誘われるでもなく勝手に初出品した当時の私は、懇親会でも「雑誌で見たことある人がいっぱいだ」くらいの物見感覚でいましたが、会場でもひととき存在感を放つ巨大な先生から優しくお声がけいただいたことは、今まで出品を続ける最初の一步となりました。

それから先生の立ち上げた企画展に参加させていただいたり、謎の業界用語を教えていただいたり、蓼科のアカデミーで直接ご指導をいただく機会もありました。正に「明日から使える実践講座」といった内容で、駆け出しの時期にその後の作家活動の礎を築けたことは大変幸運だったと思います。

作家としての丸山先生は、画風・画材・画題に至るまで、おいそれと真似のできない特異な存在でもありました。荘厳な赤富士とコミカルなブリキロボットが共存する個展会場が、私は好きでした。展覧



▶ 第八十五回記念展（2009） 文部科学大臣賞 「春の旋律」 F100

会の度にそれまで無かった新たなモチーフが登場する好奇心・探究心も、一作家として見習うべき画家の在り方であると思っています。

数年目のある時、幸運にも若手作家数名でご自宅にお招きいただく機会がありました。マナーも何も分からず緊張で頭は真っ白でしたが、当日は奥様と共に過分なおもてなしをいただいたことをよく覚えています。それまで見たことも無かった豪華な料理の数々は、画家という仕事も頑張ればいいことあるぞというメッセージのようで、いつかは自分もという気持ちに自然となっていました。先生のことですからそれもすべて計算通りだったのですが、常に周りを導くモチベーターのような振る舞いは、私を含めた多くの作家に勇気を与えていたと思います。

近年は立派なお髭も蓄え、いよいよ巨匠になっていくのを間近で見ているようでわくわくしておりました。まだ実感がありません。とても寂しいです。

### 「画家丸山勉というひと」

中島健太（会員）

丸山さんとの関係を一言で表すのは難しい。一筋縄ではいかない人だと感じていたのは何も僕だけではないだろう。手放しにいい人というわけでもなかったし、電話はとにかく長く、そしてところどころ聞きとれないくらいに声は小さかった。

それでも、プロの画家として生きるということについて、丸山さんから教わったことは数えきれない。いつも情報に敏感で、時に若手より流行りにも詳しく、新しい時代に柔軟に対応していた。

いつか僕がある売れっ子作家を揶揄した時「売れる人を批判するのは誰でも出来る。でもプロとして大事なのは売れる理由を分析し学ぶこと」そう言われてはっとしたことを覚えている。

「誰も泳げない荒波を軽やかに泳いでるように見える、それがプロの画家だよ」こんな言葉も記憶に残っている。

「軽やかに泳げる」ではなく「軽やかに泳いでるように見える」という表現は今になって思えば実にうまい表現だなと思

う。

努力や苦悩を人に見せず、いつでもプロとしてプライドを持って表現者として振る舞っていた。

そういえば丸山さんから弱音らしい言葉を聞いたことは一度もなかった。

プロの画家になるのは難しい。でもプロの画家で居続けるのはそれよりはるかにはるかに難しい。

そしてプロの画家として死ぬ。それは画家としての一つの到達点だと僕は思う。

60年の生涯をプロの画家として生き抜いた丸山さんを、僕は心から尊敬している。

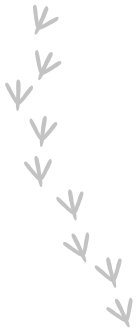
### 「男気」

山内大介（会員）

丸山勉先生は、僕の絵を二点買ってくれたことがあります。一点は2008年の頃、蓼科アカデミー中山の初年度の丸山講座でのこと、先輩の紹介もあったものの、十日間ほどのアカデミーの参加費が払えず、講師の丸山先生に相談したところ、「絵を持って来なさい。」と。「それで支払って。」と。まだまだ学生出たての僕は、作品の発表の経験も少なく、ましてや絵が売れた経験もない僕の拙い作品を買ってくれました。この経験は、ただ作品で参加費を支払ったというだけでなく、絵を描いて生きていく、作品を売って生きていくという、プロ作家の第一歩を丸山流に経験を通して教えて頂けたと感じています。丸山勉という男気までも強く印象に残りました。

また言うまでもありませんが、このチャンスを得たアカデミーで得ている経験は、それから僕の人生活に大きな影響を与えてくれています。

もう一点は、2010年の銀座の画廊でのグループ展にお越し頂いた際に、近くで中華をご馳走になりました。食べ盛り二人は、一人二人前、二人で四人前の食事を普通にした後、「もう一回見せ



▲ 白日会創立百周年記念展出品 「Toy Cars Racing」 F30号

て。」と画廊にもどりました。唐突に「これらもあっていい。」と、その場で現金支払いでした。その作品は、ずっと寝室に掛けてあるそうで、その後の何年ものご指導の際に、何度か作品の例え話にありました。

絵をつくる意識、画家としての意識、作品を発表する意識、作品を売る意識を身をおして教えていただいたように感じます。

電話での長い話、絵の話、カラオケ、趣味のことなど、いろいろなことを思い出しますが…。白日会を退会される際にご挨拶にメールを送ったら、赤い林檎の絵文字一つが帰ってきました。なんてチャミングな丸山先生。

丸山勉先生と一緒に中山忠彦先生のお棺を担がせて頂き三本松教会の階段を降りたことは、忘れ得ぬ最後の思い出です。

### 「白日会丸山組」

山本大貴（会員）

私は紛う方なきTVゲーム世代だ。幼少期にファミコンに触れ、ゲームグラフィックの進化とともに成長してきた。小学生の頃、いわゆる対戦格闘ゲームが生まれ、学校帰りに友達とよく遊



▲アカデミー中山 in 蓼科 丸山講座

んでいた。その中に「ワールドヒーローズ」という異彩を放つゲームがあった。時が経ち白日会で活動するようになって更にしばらくした頃、その開発に携わられていたのが丸山勉先生だったことを知る。「ニンジャコマンドー」、「痛快GANGAN行進曲」、私にとって先生は先輩画家であるとともにゲームクリエイターであり、画家として御縁を頂かずと昔から、知らぬところで先生の影響を受けていたといっても過言ではない。

先生からは昼夜問わずよくお電話を頂いた。内容はと言えどもつばらアニメや漫画、ゲーム（ACG）、おおよそサブカルチャーの話で占められた。紙袋一杯の漫画を送っていただいたこともある。ACGは今や現代日本美術の一端を担



▲蓼科高原バラクラにて（2012年）

う重要なファクターだ。先生の視野が美術内美術にとどまらず、より広く潮流を捉えていたのは、ゲーム産業に携わられたことによるご知見と趣味嗜好によることも大きかったはずだ。もちろんそれは同じ趣味を持つ私に合わせてくださった先生のごく一部だったとは弁えている。

中山忠彦先生が蓼科に開設されたアカデミーへ誘ってくださったのも丸山先生だ。「リアリズムコンプレックス」という企画展を立ち上げられ、若手だった我々に長年にわたりご尽力くださったことも然り。この追悼文を執筆するに当たり記憶を辿ると、私の画業の随所に先生からのご指導やご助言があったことを痛感

する。思っていた以上に自分は先生の庇護を受けていたのかもしれない。正直なところ当時はエンドレスに繰り広げられるお話に意識が飛びかけたことも数知れず。しかしその中のいくつもの断片が、画家としての実践的で強力な武器や防具であり、今も私の基本装備となっている。丸山先生、ありがとうございました。白日会丸山組の山本大貴として謹んで哀悼の意を表します。



▲横浜高島屋（2015年）



展覧会記録 個展・主なグループ展

令和七年一月

原太一展 千葉森の美術館  
小林聡一油絵展 日本橋三越本展  
長船善祐展 山口井筒屋  
西谷之男展 日本橋三越本展

二月

佐藤陽也展 横浜 仲通りギャラリー  
冬の函館・室蘭紀行 横浜 ギャラリーミロ

伊藤晴子展 日本橋高島屋  
果醐季乃子展 横浜 仲通りギャラリー  
中山忠彦×大場再生二人展

徳丸晃油彩画展 福岡小倉井筒屋  
市川市芳澤ガーデンギャラリー

三月

小林聡一油絵展 福岡三越  
中山忠彦追悼展 大分中津市木村記念美術館

ソレイユブラン 銀座 美岳画廊  
朝日夏実 伊藤大悟 荻原治 大路誠 小野月世  
亀山裕昭 河菜直子 口澤弘 黒木ゆり 小林聡一

三箇大介 鈴木真治 津絵太陽 徳田明子 西脇恵  
松崎夏実 松平一民 松林淳 村上ゆたか

長船善祐油彩画展 札幌三越

四月

田中真季展 松坂屋上野店  
北川直枝 テンペラ画展 倉敷天満屋

広田稔展 広島福山天満屋  
小林聡一油絵展 仙台三越  
佐藤陽也展 横浜 ギャラリーアーク  
山崎幹雄水彩画展 栃木総合文化センター

五月

阪東佳代個展 京都 ギャラリー Create 洛  
吉住裕美展 横浜高島屋  
長船善祐油彩画展

山形ギャラリー ナナビーンズ  
高村喜美子作品展 山形 トキワ屋  
吉成浩昭展 横浜 ギャラリーアーク

六月

洋画巨匠作家展

あべのハルカス近鉄本店

池田茂個展 伊藤清永 中山忠彦  
長船善祐油彩画展 銀座 新井画廊  
友清大介展 銀座 SASAI FINE ARTS

浅尾順子展 銀座 画廊宮坂  
柳田也寿志展 松坂屋上野店  
沖津信也個展 西武秋田店

七月

長船善祐油彩画展 丸善・丸の内本店

新潟伊勢丹

斎藤秀夫油絵展 京王百貨店 新宿店  
アストレア展 横浜 ギャラリーアーク

朝日夏実 岩本将弥 納義純 松本実桜  
木原和敏展 銀座 画廊宮坂  
浅尾順子展 千葉相田みつおギャラリー  
中島あけみ展 銀座 画廊宮坂  
三人展 京橋 ギャラリー・コパンドール

八月

中谷晃展 横浜高島屋  
たかしまや美人画博覧会 2025 日本橋高島屋

河野桂一郎 山本大貴  
長船善祐油彩画展 松山三越  
第6回阿佐美展 新宿 ギャラリー絵夢

高梨芳美 西谷之男  
かくかく展 横浜 ギャラリーミロ

宇田川格 大平嘉和 納義純 佐藤陽也  
宮本絵梨展 横浜 仲通りギャラリー  
それぞれの道 岐阜市歴史博物館分館

九月

山本真輔  
亀山裕昭展 銀座 画廊宮坂  
第4回油彩クロッキー展 横浜 ギャラリーミロ

岡田高弘 広田稔 佐藤陽也 杉本幸江 吉成浩昭  
夏の平戸・長崎紀行

横浜 仲通りギャラリー  
岡田高弘 広田稔 佐藤陽也

第47回北海道ロビー絵画展 新宿 ギャラリー絵夢  
神山晃一 高梨芳美 塚原貴之

長船善祐油彩画展 広島三越  
LANDSCAPE 目黒自由通りギャラリー  
沖津信也個展 岡山伊勢丹  
中山忠彦追悼展 山形県芸文美術館

市川市芳澤ガーデンギャラリー  
岡田高弘展 横浜 仲通りギャラリー  
poo a poo スペイン紀行展 横浜 ギャラリーミロ

小野月世展 岡田高弘 杉本幸江 宮崎宗久  
岡田高弘展 横浜 ギャラリーアーク  
第19回アヴニール展 日本橋 春風洞画廊

伊勢田理沙 今井喬裕 亀山裕昭 小森隼人  
高橋和正 富所龍人 山本大貴

十月

中谷晃展 銀座 永井画廊  
関口雅文展 新潟 星と森の詩美術館  
Drawing Room 横浜 仲通りギャラリー

山内大介油彩画展 日本橋三越本店  
長船善祐油彩画展 仙台三越

第8回咬の会 大阪 梅田画廊

熊谷有展 寺久保文宣 広田稔 木原和敏 児玉健二  
関口雅文 山本桂右 李曉剛 和田直樹

第14回 Tree 展  
栃木足利銀行岡本支店

100枚のクロッキー展  
横濱馬車道アートギャラリー

南青山ギャラリーアルトン  
永瀬美緒 宮本絵梨

納義純展  
横濱ギャラリーアーケ

十二月

2025 白日星の会

長谷川晶子展  
横濱 仲通りギャラリー

南青山田島美術店 AOYAMA

長船善祐 油彩画展  
福岡三越

今利美咲 佐々木剛 佐藤陽也 嶋中俊文

吉間春樹展  
銀座 SASAI FINE ARTS

鈴木真治 永田和之 廣瀬順子 柳田也寿志

第28回アニメアート展  
横浜 ギャラリーアーケ

山下あゆ美 山本健 茅原佳介

広田稔展  
福岡三越

納義純 果醐季乃子 佐藤陽也 関口雅文

椿苑絵画展  
岡山倉敷天満屋

長谷川晶子 広田稔 吉成浩昭 和田直樹

亀山裕昭 油絵展  
茨城 京成百貨店

徳丸晃 水彩画展  
宮崎 ギャラリー石蔵

吉田直末の世界  
秋田 ギャラリーあい

有田巧展  
横浜 高島屋

堀博喜 油彩展  
松坂屋名古屋店

十一月

第7回アルナイルの会 大阪ギャルリVEGA

大木基彰 大路誠 久保君代 坂元忠夫 三箇大介

鏡泰裕 個展  
新富 かわうそ画廊

三澤忠 卒寿記念展  
長野 中野陣屋・県庁記念館

大山富夫展  
銀座 画廊宮坂

朝森武・港井里佳 二人展 松坂屋上野店

野澤剛展 栃木 GALLERY IN THE BLUE

原太一展  
銀座 日動画廊

第15回山崎幹雄スケッチ展



ホームページの展覧会掲載について

白日会ホームページにある展覧会情報「支部展・個展・グループ展」のページに掲載をご希望の在籍者は、白日会事務所にまで展覧会のDMを郵送またはメールにてお送りください。尚、掲載には数日みていただくと共に、郵送の場合は発送から到着まで日数がかかりますので、会期が近づいている場合はなるべくメールをご利用ください。

春の研究會

令和八年二月八日(日)

10時〜終了次第

受付 9時45分〜13時半

参加費 一人五千円(昼食等含む)・見学も同様

会場 日展会館 東京都台東区上野桜木一丁目一

電話 〇三三三八二一〇四五三

【交通のご案内】

JR「鶯谷駅」北口より徒歩五分・地下鉄千代田線「根津駅」より徒歩一五分

※二階受付順となりますのでご了承ください。

※日展会館には駐車場はありません。車でご来場の方は必ず近くの有料駐車場に駐車してください。

住所変更時のお願い

住所の変更がありましたら、早めに白日会事務所までお知らせ下さい。住所録に反映されるのは二月半ばまでに届けられた住所となり、出品票に記入した住所は翌年の住所録に反映されます。

訃報

堂園和男(会員) 令和六年逝去

黒澤信男(特別会員) 令和七年二月逝去

高松遙子(会員) 令和七年三月逝去

中村泰子(会員) 令和七年五月逝去

石井勤(会員) 令和七年八月逝去

渡邊裕榮(会員) 令和七年八月逝去

※訃報の掲載は会員のみとなります。

編集後記

白日会は、百回展を終えた一昨年の秋に中山忠彦会長という大きな柱を失いましたが、体制を改めて、斎藤秀夫代表の元に新しい時代に向かって進み行くことになりました。中山会長は伊藤清永先生の最初の弟子、斎藤代表は伊藤先生の最後の弟子です。伊藤先生は白日会中興の祖であり、そして先達の精神が流れ込んでいました。その当会創立からの精神であった「研究団体」ということを頻繁に先生は提唱されておりました。この「研究団体」という原点を見据えながら再出発します。そして、より一層「白日会」見てよし、出してよし」となればと思います。

さて、今回の「会報」で、紙媒体での発行を取りやめ、ホームページによる通信としてリニューアルすることになりました。紙媒体を好まれ愛されてきました方々には大変申し訳ない思いではありますが、出力するとA4の紙面となるようなものにしていく予定です。また会報は年に一回の発行ですが、ホームページなら個別にそして適宜掲載できるかもしれません。新しい形となった「会報」にご期待ください。(寺)

発行 白日会事務所  
寺久保文宣 阿辺隆 小河美智子  
久保尚子 吉田純子  
印刷 六光社